

2020年度教育奨励基金「学習・研究奨励金」
学習・研究成果報告書

ナッジを用いたCOVID-19感染対策の 開発と普及

看護医療政策学生会SAPnmc 看護医療学部2年

代表：中村希美

メンバー：木村光里、桑原日菜子、齊藤さくら、杉浦美帆、高堀香菜

指導教員：看護医療学部 小池智子

1. 研究背景

2019年12月に中国で新型コロナウイルス（以下、COVID-19）感染が報告されて以降、世界的に感染が拡大している。感染の収束には、私たち市民のひとりひとりが所謂「三密を避ける」行動や「手洗い・マスク着用」の予防行動を徹底し、この新型コロナウイルス感染の撲滅に参画し、行動することが不可欠である。しかし、市民全体が当事者意識を共有することは非常に難しく、ひとりひとりの意識を変え行動に移すよう促すことはさらに困難である。そこで、当時者意識や危機意識が薄い人々でも、感染拡大防止行動を自然にとることができる方策を提案するために、行動経済学の「ナッジ」に着目した感染予防策を検討した。

本研究の構成は、a.ナッジライブラリーの作成、b.感染予防行動に関する意識調査、c.ナッジを用いた感染予防対策の開発、d.開発した感染対策の評価、の4ステップである。

2. 研究成果

a. ナッジライブラリーの作成

ナッジを活用した世界各国のCOVID-19感染対策を探索し、医療・介護現場においても活用できる「ナッジライブラリー」を作成した。学術論文や新聞報道、SNS等からナッジによる取り感染予防の取り組みを探索し、手指衛生、咳エチケット、ソーシャルディスタンスの3つの分類からなる31件の予防対策が収集された。それぞれの感染予防対策について、予防方法の概要、効果やそのエビデンス、医療・介護施設への応用方法を示した。

文献・記事等の検索により、国内外に、生活の中に簡便に取り入れることができる魅力的なナッジのアイデアが多く存在していた。長引く感染状況の中、人びとの予防行動を促し持続させるためには、意外性で惹き付け関心や興味を引くナッジを用いた方法と、意識せずとも自然に行動してしまう方法をうまく組み込むことが重要だと分った。

b. 感染予防行動に関する意識調査

COVID-19下における予防行動（手指衛生、咳エチケット、ソーシャルディスタンス）の状況と予防に対する意識を調査することを目的に、全国の大学生を対象にweb上でアンケートを行った。実施期間は2020年8月13日～8月31日で、469件の有効回答を得た。

調査結果からは、大学生の7割以上が日常的に感染予防行動をとっていることが分かった。特にマスク着用や、広い空間がある場所でのソーシャルディスタンス、外出時や食事前の手指衛生は、多くが習慣化していた。一方、これらの感染予防対策が実施できない者の理由を分析したところ、手指衛生ができないのは「うっかり忘れ」が多く、外出時の手指消毒では「近くに消毒剤がない」がボトルネックになっていることが分った。うっかり忘れを予防し、予防行動をとりやすい状況をつくるため、ナッジを用いた対策を検討した。

c. ナッジを用いた感染予防対策の開発とその評価

前述のbで実施したアンケートの分析の結果で明らかになったボトルネックに着目し、日本の学生の文化や行動様式を検討した上で、ナッジを用いた6つの感染対策を考案した。さらに、考案した6つの感染対策の使用可能性等について評価し、改善のための資料を得ることを目的に、webアンケート調査を行った。実施期間は2020年11月22日～11月30日で、183件の有効回答を得た。

調査結果から、図1や図3のように自分で作る手間がないものや既製品を少し工夫するだけのものの方が簡単で、「使いたい」という回答が多かった。また、図2や図4のような見慣れていないアイデアが人々の関心を集め、デザイン性や新規性も重要であることが分った。これらのアイデアをナッジ設計のフレームワークであるEAST（Easy/Attractive/Social/timely）に従って評価すると、使用したいと回答した割合が高かった対策は、「簡単・簡潔」で「魅力的・印象的」と評価されたものであった。

表1 考案した感染対策とその評価

	名称	「使いたい」の回答割合
--	----	-------------

図1	消毒液を十分量使うとはなまるが出てくる消毒ボトル	74.3%
図2	スマホ除菌を促すポスター	72.1%
図3	消毒の減りが目に見えてわかるデザイン	64.9%
図4	帰宅時の手指衛生を促すデザイン	60.2%
図5	除菌シート付きスマホケース	36.9%
図6	正しく着用しないと笑われるマスク	19.6%



3



図4

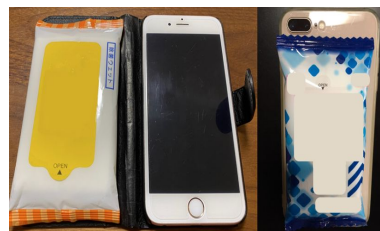


図5



図6

3. 考察

人や集団によって感染予防行動のボトルネックは異なることから、全ての人に効果のある対策はない。このため、一般的な予防対策に加え、人びとの予防行動のボトルネックを探り、それに対して効果的に作用するナッジを用いた感染対策を検討していくことが重要である。また、ナッジによる対策が広く使われ効果を生み出すためには、“簡潔・簡便”で“魅力的・印象的”であることが不可欠である。感染予防行動を継続するためには、簡単で魅力的で飽きにくく、習慣化できるような仕掛けや環境作りが重要である。

4. 研究成果

- 1) 第2回医療介護勤務環境改善ナッジ研究会 口頭発表(2020年12月・オンライン)
- 2) ORF2020展示部門 展示予定(2021年3月・オンライン)
- 3) 第19回慶應SFC学会学術交流大会春季大会 展示予定(2021年3月・オンライン)
- 4) 大学広報誌「塾」2021年社中特別号p36 掲載(2021年1月)

謝辞

本研究は、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス教育奨励基金「学習・研究奨励基金」の助成により行われました。研究活動を支えてくださった慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス教育奨励基金ならびに城南信用金庫様に心から感謝いたします。